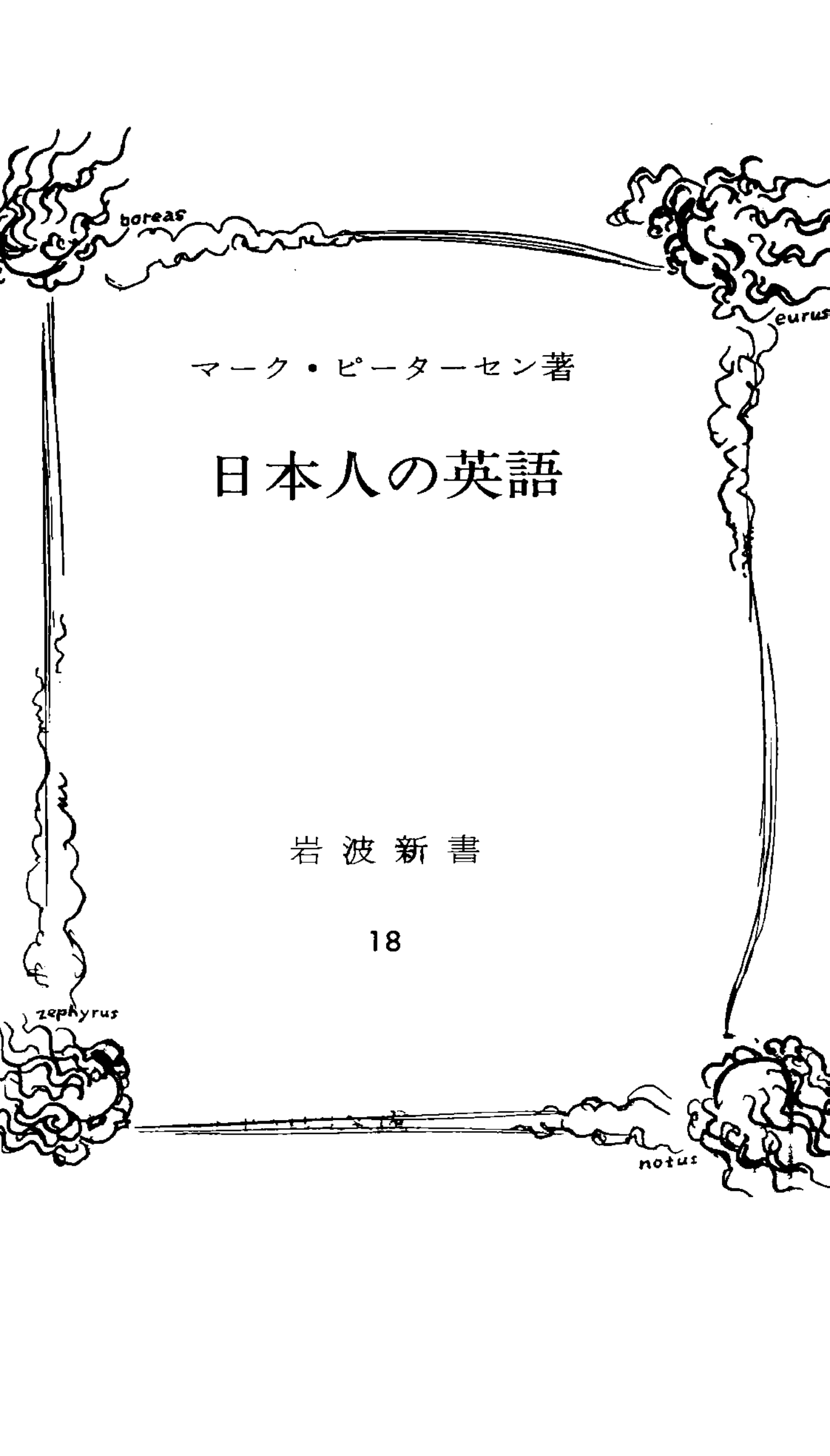


マーク・ピーターセン著

# 日本人の英語





マーク・ピーターセン著

# 日本人の英語

岩波新書

18

マーク・ピーターセン (Mark Petersen)

アメリカのウィスコンシン州出身。コロラド大学で英米文学、ワシントン大学大学院で近代日本文学を専攻。1980年フルブライト留学生として来日、東京工業大学にて「正宗白鳥」を研究。

現在——明治大学政治経済学部専任講師

日本人の英語

岩波新書(新赤版) 18

1988年4月20日 第1刷発行 ©

1988年6月6日 第4刷発行

定価 480 円

著 者 マーク・ピーターセン

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan  
ISBN 4-00-430018-5

## 目 次

|    |                   |    |
|----|-------------------|----|
| 1  | メイド・イン・ジャパン ..... | 1  |
|    | はじめに              |    |
| 2  | 鶏を一羽食べてしまった ..... | 10 |
|    | 不定冠詞              |    |
| 3  | あの人ってだれ? .....    | 20 |
|    | 定冠詞               |    |
| 4  | 間違いの喜劇 .....      | 29 |
|    | 単数と複数             |    |
| 5  | 思いやりがなさすぎる .....  | 38 |
|    | 純粹不可算名詞           |    |
| 6  | 文脈がすべて .....      | 48 |
|    | 冠詞と複数             |    |
| 7  | 慣用の思し召し .....     | 56 |
|    | さまざまな前置詞          |    |
| 8  | 意識の上での距離 .....    | 64 |
|    | on と in           |    |
| 9  | 「かつら」と「かもじ」 ..... | 72 |
|    | off と out         |    |
| 10 | 明治な大学 .....       | 82 |
|    | 名詞+of+名詞          |    |
| 11 | もっと英語らしく .....    | 89 |
|    | 動詞+副詞             |    |

|    |                      |     |
|----|----------------------|-----|
| 12 | 点と線 .....            | 96  |
|    | 完了形と進行形              |     |
| 13 | 泣きつづける彼女 .....       | 107 |
|    | 未来形                  |     |
| 14 | 去年受賞したノーベル賞 .....    | 118 |
|    | 関係詞の二つの用法            |     |
| 15 | アダルトな表現をめざして .....   | 129 |
|    | 先行詞と関係節              |     |
| 16 | 慎重とひねくれ .....        | 139 |
|    | 受動態と能動態              |     |
| 17 | 知識から応用へ .....        | 150 |
|    | 副詞                   |     |
| 18 | したがってそれに応じる .....    | 160 |
|    | 副詞と論理構造              |     |
| 19 | 「だから」と「だからさ」の間 ..... | 170 |
|    | 接続詞                  |     |
| 20 | 自然な流れを大切に .....      | 181 |
|    | おわりに                 |     |
|    | あとがき .....           | 195 |

## Ⅱ メイド・イン・ジャパン

はじめに

---

---

Naturally, I am biased in favour of boys learning English.

—Winston Churchill

当然のことながら、少年たちはまず英語を学ぶべきだという主張に私は与<sup>くみ</sup>するものである。

—ウィンストン・チャーチル

---

---

### 母のコートと私のラジオ

私が子どものころ、母の誕生日パーティーはいつもにぎやかだった。母は双子で、その妹と揃って八人兄弟の「二人末っ子」だったので、小さい時からかなりの人気者だったらしい。大人になっても、二人の誕生日になると、大家族が集まることになっていた。

私が八歳の時、隣のイリノイ州に住む多勢の親戚の人たちの都合がたまたまよかったのか、その年の集まりは特別に大きくなった。パーティーでは、母と、私の叔母にあたるその妹は、それぞれの夫からプレゼントとして、全く同じ黄褐色のキャメル・コートをもらった。とても上等なものにみえたので、貧乏人の多いイリノイ州

の連中はちょっと驚き、「ウィスコンシンって、このごろ裕福になったのね」などとふざけて騒いでいた。気持ちよさそうに着て見せる母たちも、大いに喜んでいる顔をする。

ちょうどそのざわめきが静まろうとするころ、私と同じ年の、悪戯上手ないところが叔母の方のコートを手に取り、その裏側を覗いてみる。彼は、小さな活字を読んでいるかのように目を細め、「メイド・イン・ジャパンだって」と大きな声でいう。皆は一瞬、ショックを受けた。叔父は「バカ」と言って、いとこの横つつらを軽く張り、父も「なあに言ってんだ」と笑っていたが、子供の言葉を素直に受け取った大人の双子は、思わず顔を見合わせて泣き出してしまった。

説明するまでもなかろうが、当時のアメリカでは、「メイド・イン・ジャパン」といったら、笑うほど安価で、見かけ倒しの品という意味になり、小中学生の流行語であった。それは楽しいジョークであった。

むろん、そのジョークは今のアメリカの子供には通じないであろう。一世代で世の中がそれだけ変わってきた。しかし、考えてみれば、私が初めて日本のことで感心したのも、同じ八歳のころであった。ある日、友達が安物雑貨店で見つけたロケット型の鉱石ラジオを学校に持ってきた。本体は、8センチばかり、胸のポケットにちょうど入るくらいで、アンテナも3センチほどノーズコン

から出る。私の生れて初めて見た、小さなイヤホンも付いていた。値段は手頃の 89 セントで、音は意外と綺麗であった。

小型化時代が始まろうとしていた頃、アメリカの大人はまだ「ビッグ・イズ・ベスト」感覚で物を見ていたかもしれないが、私たち子供は「ロケット・ラジオ」を全く違う目で見えていたであろう。長くはもつまいと思いつながら、友達は皆それを買ひ、授業中でも秘かに聴いていた。アメリカの男の子の心を妙に惹く製品であった。

### 英文説明書もメイド・イン・ジャパン

そのラジオに付いていた英文の取扱説明書も忘れられない。ちゃんとした印刷物なのに、英語がとてもおかしいというところが、非常に印象的であった。おそらく、それまではそういうものに気づいたことはなかったのであろう。今、その文章を思い出してみると、英文といっても、日本語からの直訳だったので、ある意味では、それは私の日本語とのそもそもの出会いといってもよいであろう。具体的にいえば次のような英文で、今でも記憶に残っている。

Drag out an antenna, pinching it between one's finger.

このセンテンスは、なかなか日本語にならない、わけの分からない部分もあるが、敢えて訳してみれば、「あるア



ンテナを人の指一本でつまみながら、引きずり出して下さい」とというような日本語になるであろう。

こういったセンテンスが突然現われてきたら、子供がびっくりするのも無理はないと思う。が、その英語を日本語として読めば(つまり、日本語にない冠詞(a/the)と数(単数/複数)を無視し、単語の意味を自由に解釈すれば),

「アンテナを指でつまんで引き延ばして下さい」というふうに受け取ってよいであろう。英語でいえば,

Grasping the antenna with the fingers, pull it out.  
あるいは、もう少し英語らしくいえば,

Pull out the antenna.  
という文になる。

私の一代で世の中が変わって、もう「ばあちゃん」となっている母たちは、もらったものが「メイド・イン・ジャパン」だといわれても、一段と喜ぶだけであろうが、なぜか一般の日本人の書く英語は、上の例と全然変わっていないようである。私はほとんど毎日何かの形で、大学生や、研究者、公務員、会社員などの書いた英文を見る機会があるが、正直にいえば、その文章は、八歳で生れて初めて見て驚いた英文と比べて、これといった進歩の跡は見られない。最も変わらない特徴は、明らかに日本語で考えながら作ったという印象が非常に強いことである。

いま、大変皮肉なことに、アメリカ人の私は日本人の英語問題を日本語で考えながら、日本語のワープロに向かって、本書を書いている。これから、この本で、私自身の「日本語問題」を感じながら、さまざまな英語の問題点を日本語で説明しようとする。私の書く日本語は、日本語らしくないところも多く、日本人が書いた文章と間違えられることはないであろう。しかし、もし私がそれを英語で考えながら書いたとしたら、もっとおかしいはずである。英語で考えながら和文を作ろうとすると、たとえば

**She boarded the subway in Shibuya.**

のような英語がすぐに、

**彼女は地下鉄を渋谷に乗りました。**

あるいは

**I took the exam.**

のような英語が

**私は試験を取りました。**

などというような日本語になってしまう。

### **英語を支える論理**

現在、日本の科学研究レベルは世界一流となっているが、その研究成果を世界に発表する義務をもつ日本の科学者の英文は、私の見るところ、「彼女は地下鉄を渋谷に乗りました。」の程度のものが多い。

私は、自分には日本の英語教育を批判する資格は全くないと思っていて、英語をどういうふうに教えたらいいかと迷いながら、毎日の授業を進めているけれども、日本の典型的な英文法書の説明の仕方には、基本的な問題があるような気がする。たとえば、**the United States of America**(あるいは **the U. S. A.**)という表現を、日本では「Song for U. S. A.」などのような、**the** が抜けた極めて異様な形でよく見かけるが、英文法書を見ても、どういう理屈で **the United States of America** の **the** が必要であるかは、あるいは、**the** は表現にどういう意味を与えているかは、説明しない。ただ、「定冠詞は次のような名詞につける……特定の国名：**the United States of America, the Netherlands** など。ただし、**Japan, Canada** はつけない」のように解説するだけである。

この類の説明では、読者の誤解を誘うのは当然だと思う。これは英語のネイティブ・スピーカーにとっては、滑稽に感じられる、よくある例である。本当は **U. S. A.** に **the** がつくのは固有名詞だから、あるいは国名だからではなく、普通名詞の **states** があるからである。**The Mississippi River** も同じである。川の名前だからではなく、普通名詞の **river** があるから **the** がつくのである。この二つの例は、厳密に言えば、それぞれ **the states which are united/the river named Mississippi** という論

理に従った the の使い方である。

もし、日本の英文法書と同じように、日本語を知らない人に「は」と「が」のつけかたを教えようとして、

「**が**の一般用法……**が**は次のような名詞につける  
……特定の自然現象：風**が**吹く，日**が**沈む．ただし，  
雪**は**降る，貴方**は**来ない，というのもあるので，御  
注意．」

というような例を示したとしても、おそらく日本語のネイティブ・スピーカーには私が感じたのと同じような滑稽さを感じさせるだけであろう。

### 日本人にとっての問題点

本書では、英文に内在する論理がいかに構造的に支えられているか、英語のいろいろな構成がどのような意味をどのように表わしているかを考え、英語と日本語の構成と論理の違いからくる日本人の冒しやすい間違いを例として吟味する。そしてどうすれば the mental world of Japanese logic から、英語の「頭脳環境」に入っていけるかを考えたいと思う。

私が見てきたかぎりの日本人の英文のミスの中で、意志伝達上大きな障害と思われるものを大別し、重要なものから順(descending order of severity)に取り上げてみると、次のようになる。

1. 冠詞と数. a, the, 複数, 単数などの意識の問題.

ここに英語の論理の心があり、観念の上では、この二つ(冠詞と数)を別々に考慮することは不可能に近い。

2. 前置詞句. 英語には前置詞(to, at, in, on, about, around など)がきわめて多いので、それによって非常に微細な区別がつけられるが、その反面、トラブルメーカーになりやすい。

3. Tense. 文法の「時制」。日本語には、時制の代りに「相」(aspect)というのがあり、tense 自体がないというところからさまざまな奇妙な英語が生ずる。

4. 関係代名詞. that, which など. 用法は完全に論理的で、基本的には使いやすい品詞。

5. 受動態. 論文に目立つ受動態の使いすぎの問題を考えてみる。

6. 論理関係を表わす言葉. これには因果関係を表わす言葉(consequently, because など)から、もっと微妙な関係を表わす言葉(thereby, accordingly など)まで、英語にも日本語と同じく非常に豊富にあるが、英語と日本語の感覚の違いから使い方に問題が出てくる。

これらの問題に次章から本格的に取り組むことにしたいと思う。

## 英語の頭脳環境へ

ところで私自身は、この2年間、日本語を書く仕事が多かったが、まだそれに慣れていない。いまだにフラス

トレーションばかり感じている。語彙が限られているし、言い方が自然であるかどうかは、自分の判断力だけでは自信が全然ない。いくら時間をかけて書いたとしても、書き上がったところで、「いいものが書けたな」という満足感を得たこともない。

私は、和英大辞典を壁に放り投げ、研究室の窓を開けて「日本語が嫌い」と叫んだことがある。恐ろしいことに、それは、日本語で叫んだのである。かなり夢中になっていて、かなり頭がおかしくなっていたので、日本語に関しての不満を日本語で言ってしまった。これは、自分からいうのはおかしいが、そういうような精神状態を読者にも薦めたいと思う。“read, read, read”の上にさらに“write, write, write”のあまり、フラストレーションが高まってきて、頭がおかしくなり、“I hate English!”とつい英語で叫んでしまうくらい、英語の「頭脳環境」に入ってみてほしいと思う。周囲の日本語の環境を変えることはできないかもしれないが、集中的に努力すれば、日本にいながら頭脳の中の環境を英語に変えることはできると思う。そうすれば、英文の読み書きもかなり上手になる。また、しばらくの間、英語から離れていれば、頭はほとんど元どおりにもどるので、だれも後悔しないと自信をもって言える。もし、そのつもりでこの本を読んでいただければ、なにより嬉しく思う。

## 2 鶏を一羽食べてしまった

不定冠詞

---

---

'Tis not the meat, but 'tis the appetite makes eating a delight.

—Sir John Suckling

食事を喜ばしきものにするのは  
料理にあらず，食欲なり

—サー・ジョン・サックリング

---

---

### a は名詞につくアクセサリーではない

先日、アメリカに留学している日本人の友だちから手紙がきたが、その中に次の文章がいきなり出てきた。

Last night, I ate a chicken in the backyard. (昨夜、鶏を1羽[捕まえて、そのまま]裏庭で食べ[てしまっ]た。)

これをみたときの気持は非常に複雑で、なかなか日本語では説明できないが、ちょうどあてはまる英語の決まり文句でいえば、I didn't know whether to laugh or to cry. という気持であった。

おそらくその文章で友だちがいおうとしたのは、アメリカの普通の backyard chicken barbecue で鶏肉を食

べたこと(つまり, I ate **a** chicken でなく, I ate chicken)にすぎないと, 私は判読したが, 不思議なことに, Last night, I ate **a** chicken in the backyard. という文章は, 正しい英文としても, 間違いの英文としても, 傑作といってよいものである。正しい英文として読めば, 簡潔で, とてもヴィヴィッドで説得力のある表現になるのである。夜がふけて暗くなってきた裏庭で, 友だちが血と羽だらけの口元に微笑を浮かべながら, ふくらんだ腹を満足そうに撫でている——このような生き生きとした情景が浮かんでくるのである。もし彼が, chicken(鶏肉)と a chicken(ある1羽の鶏)の意味の違いを認識したうえで, わざとそう書いたのなら, 帰国せずに, 文筆によってアメリカでよい暮らしを立てられるであろう。

しかし, この文章が間違いであるとしても, a という文字の有無だけでどんな変化が起こりうるかを示す例文として, これほどよいものは少ないと思う。聖書は, How forcible are right words!(正しい言葉はいかに力のあるものか; ヨブ記: 6.25)と教えているが, 英語のネイティブ・スピーカーがとても発想しきれない彼の言葉をみれば, How forcible are **wrong** words! とも思われる。

日本の英文法書では“a(an)”の「用法と不使用」を論じるとき「名詞に a がつくかつかないか」あるいは「名詞に a をつけるかつけないか」の問題として取り上げる



のが普通である。ところが、これは非現実的で、とても誤解を招く言い方である。ネイティブ・スピーカーにとって、「名詞に a をつける」という表現は無意味である。

英語で話すとき——ものを書くときも、考えるときも——先行して意味的カテゴリーを決めるのは名詞でなく、a の有無である。そのカテゴリーに適切な名詞が選ばれるのはその次である。もし「つける」で表現すれば、「a に名詞をつける」としかいいようがない。「名詞に a をつける」という考え方は、実際には英語の世界には存在しないからである。

たとえば、日本語の英文法用語を調べるためにいつも私の机の上においてある参考書は

「**不定冠詞**は具体的な一個体をなすものを表わす**名詞**に付ける。したがって、**単数普通名詞**は特別の場合を除き**不定冠詞**をとる」

というふうの説明し、そしてチャールズ・ディッケンズの小説から

He applied himself to a second glass of the old Madeira, with increased relish. (彼は古いマデイラ酒の二杯目をいよいよおいしそうに傾けた。)

というセンテンスを引用して、その不定冠詞のルールを例証する。この類の説明では、すでにあった、ちゃんとした意味をもった名詞に、a (an) は、まるでアクセサリのように「正しく」つけられるものであるかのように